

シャントと共に生きて

—患者体験談—

石塚 裕也

私は幼稚園の卒園間際であった5歳のときに交通事故に遭い、すぐに市立越谷病院に搬送され、検査を受けることになりました。結果はクモ膜脳腫を起こしているということでしたが、手術をしなくても一生を平穩無事に過ごせる可能性もあることや、私がまだ小さかったこともあり、手術をするかどうか担当医や家族も悩んだそうです。しかし、将来的にクモ膜脳腫は脳内出血などを起こしやすいということがあるため、相談の未入院して手術を受けることが決まり、圧固定式のシリコンのシャントチューブを埋めることになりました。

うまくシャントも適合したのか、その後は何事もなく過ぎ、高校2年生になるまでは、シャントを入れているからといって特に注意して生活することもなく、むしろシャントを入れていることすらすっかり忘れて普通に高校生活を送っていました。

ところが、高校2年生に進級したころから頭痛が頻繁に起こるようになり、特に昼過ぎになると痛みは耐え難いほどで、保健室に行っては薬をもらってベッドに横になっているという生活がしばらく続きました。そうこうするうちに、当時水泳部に所属していたのですが、大会のあったその日にあまりに具合が悪くなり、これでは参加は無理だということで試合を棄権して帰宅する途中、頭痛のために乗っていた自転車ごと倒れ、救急車で病院に搬送されるということがありました。

そのときは、筋肉性の頭痛ではないかと診断され、1カ月ほど自宅療養をしていたのですが、一向によくなる気配がありませんでした。私は倒れたときから、「これは幼稚園のときのことが原因なのではないか」と感じていたので、それを病院側に告げ再検査をもらったところ、体がシャントに依存してしまっていて脳脊髄液を自分で吸収しなくなってしまう、水頭症を発症しているということが判明しました。既に脳圧が高くなっていてあぶない状態だということがはっきりしましたので、1カ月間は腰椎にチューブを通して脳脊髄液を体の外に流すという処置をとり、その後、手術に踏み切ることになりました。それ以降、市立越谷病院の角田先生のお世話になっています。

手術自体は大したものではありません、終わって1週間もすれば抜糸できるようなものだったのですが、何度もシャントが詰まってしまって、結局計3回も手術を受けることになりました。初めのうちは、体への侵襲の度合いの少なさも考えて、こちらのほうが体によいだろうとL-P

石塚 裕也 / いしづか・ゆうや

1981年、埼玉県生まれ。2003年、専門学校を卒業し、診療放射線技師国家試験に合格。現在、放射線技師の仕事に就くべく、就職活動を行っている。



シャント(*1)を試したのですが、2回とも詰まって失敗してしまったので、3回目に(株)東機貿が開発販売しているソフィサ社製の圧可変式バルブ(*2)を埋め込むことになりました。幸い、この手術は成功し、無事退院することができました。

高校2年生の2学期をほぼまるまる休学してしまったので、進級できるかどうかおぼつかなかったのですが、担任の先生や水泳部顧問の先生のご尽力で、なんとか無事3年生に進級し復学できることになりました。時々頭痛はあったものの、高校生活は順調に送ることができました。

そして大学進学を考える時期になったころ、やはり自分が病気になる経験を活かせるのは医療系しかないと思い、また当時東海村の原発事故の問題から放射線に関心を持ったこともあって、放射線技師の養成専門学校に3年間通うことを決意しました。学校では、時々頭痛のためにテストを受けられないなどのハンデがありましたが、臨床実習のときには腰椎穿刺を受けている患者さんの気持ち痛いほど分かるなど、他の学生とは違った視点で学校生活を送れたことは、とても意義があったと感じています。

ただ、今年の2月下旬からしばらく頭痛がひどかったため、検査入院を繰り返し、病院のベッドを確保しながら学校に通うという日々が続きました。そのようなときでも、私はよく周囲に「患者の気持ち分かる放射線技師になってみせる」と言っていた覚えがあります。手術、入院、検査など、一通り色々なことを経験してきたので、やはり患者さんの気持ちはよく分かります。そこくらいは他人よりも一歩秀でていると考えぜひ活かしてみようではないかと、強く心に思ったのです。こうして、なんとか学校も卒業し、無事国家試験にもパスすることができました。

また、こちらの(株)東機貿の佐多社長が「医療機器を愛してください」というキャンペーンを展開していると知り、私はとても共感を覚えました。

専門学校に通っていたころ、担任の先生が「医療機器はちゃんと愛してあげないと動かないんだよ」と言っていたことを思い出しました。確かに医療機器あつての放射線技師ですから、そういった意味での



高校の文化祭にて

発言でもあったのかもしれませんが、実際臨床実習中にリニアックから電子線が出なくなってしまうというトラブルが起きたときに、「もう少し頑張ってくれよ」と何度か声をかけると、不思議に動くようになって、ああ本当のことなんだなあ実感したという経験もあります。

また、私自身についても、シャントに心の中で語りかけるということをよくしています。頭痛がすると、「シャント君、ちゃんと動いてよ」と念を送ります(笑)、外出中に頭痛が起こったりすると「俺がまず頑張って駅まで行ったら、駅まで行ったら今度は君がちゃんと動いてくれよ」と話しかけたりもします。でもそうすると、不思議と痛みが楽になったりするときがあるのです。シャントなしでは普通の生活が送れないわけですから、常にシャントは私の意識にあり、またシャントがあつてよかったなあと感じることが日常生活において多々あります。

病院と相談した結果、今後の計画としては、シャントの圧を変えながら自身の治癒能力を向上させ、元の体に戻すということです。シャントはそのような意味でも私の人生にとっての相棒であり、また案内役のようなものでもあると言えるでしょう。

それ以外にも、やはり病気をして意識が変わったと感じるときがあります。高校生のときに手術を受けた際、何回手術をしてもシャントが詰まって失敗してしまうので、このままでは治らないのではないかと死ぬのではないかと本気で心配したことがあったのです。そのときに、なにかの本を読んで「死にざま」というものを強く意識するようになりました。

以前はどちらかというと引っ込み思案で地味な性格だったのですが、どうせ死ぬならやりたいことをやって死のう、笑って楽しく過ごして生きようと、どこか吹切れたというか、自分の意識が変わったなということを感じました。これも本で読んだのですが、その中の一文に「人間は一生で二度死ぬ。一度目は肉体が死んだときで、二度目はその人のことを覚えている人々がなくなったときだ」というものがあって、心にとでも残ったのです。それならば、よい意味で、周囲の人の印象に残るような人間になりたいと思うようになりました。自分も笑って笑って、そして人を笑わせて生きてみよう。

病気になったばかりのころは、病気のことを隠していたのですが、今は話のネタにもできるくらいです。よい意味で一線をひいてしまっ



ソフィサ社製 圧可変式バルブ

たというか、世の中には病気をする人としらない人がいて、私は病気をする側なのだから、それではいっそその人生を思いっきり楽しんで過ごそうではないかと考えられるようになったのです。

しかし、色々苦しいことや辛いことはあったものの、やはりここまでなんとか無事に過ごしてこられたのは、両親や市立越谷病院の角田先生、そして今私の頭の中で必死に動いてくれているシャントバルブのおかげには違いありません。なかなか言葉にすることはできないのですが、いつもみなさんには心の中で感謝しています。

これからもまだまだみなさんの協力を必要とするかもしれませんが、放射線技師として無事就職を決め、そして患者さんのために一生懸命働いていければと思っています。

最後に、今回このような紙面をお借りし、体験談を掲載させていただいたことを大変感謝しています。今後も、(株)東機質には、より一層充実したシャントバルブの開発をお願いし、また私のような水頭症患者のために頑張っていたいただきたいと思います。(株)東機質のますますの発展を心より祈念いたします。

(* 1) カテーテルを腰椎・クモ膜下腔内に挿入し、腰椎クモ膜下腔から腹腔内に脳脊髄液を排液するというシャント法

(* 2) 1985年にソフィサ社が開発した、世界初の埋め込み式の圧可変式シャントバルブ